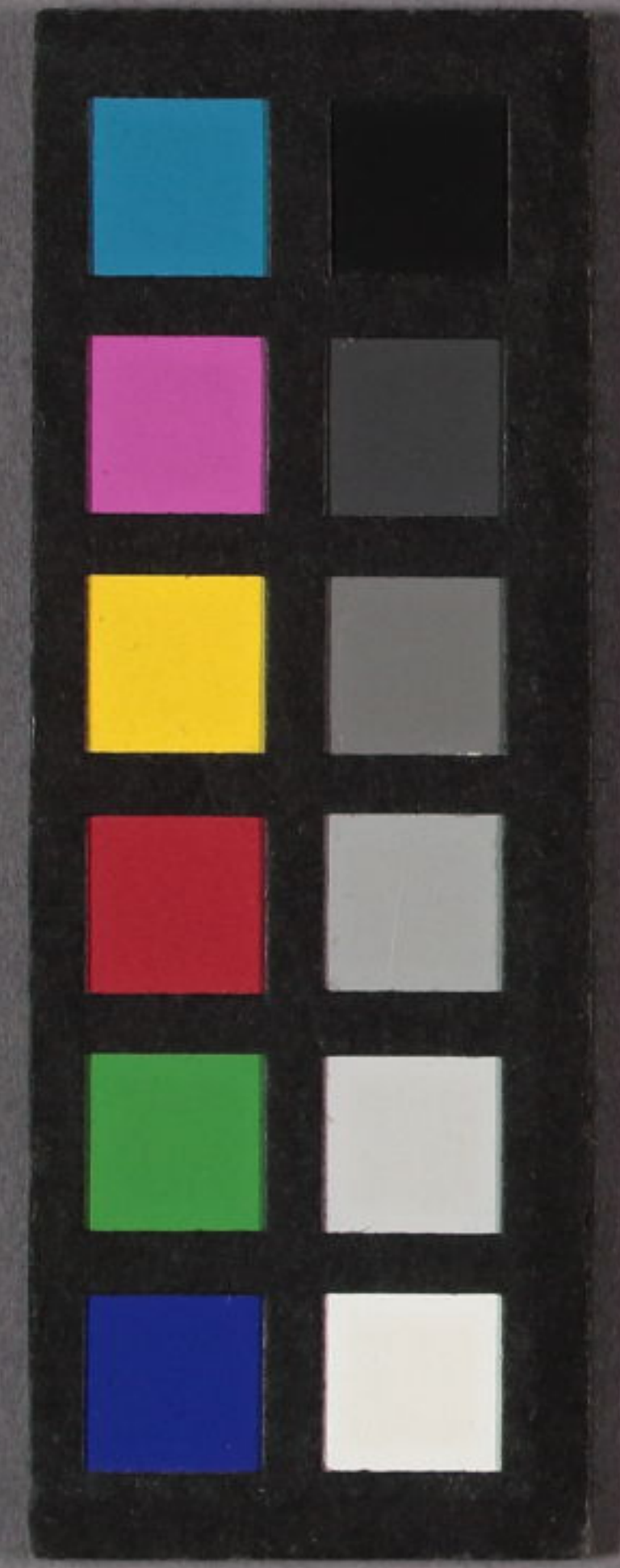


唐乃
漢城の
佐寢
四

遠 13
1908
4

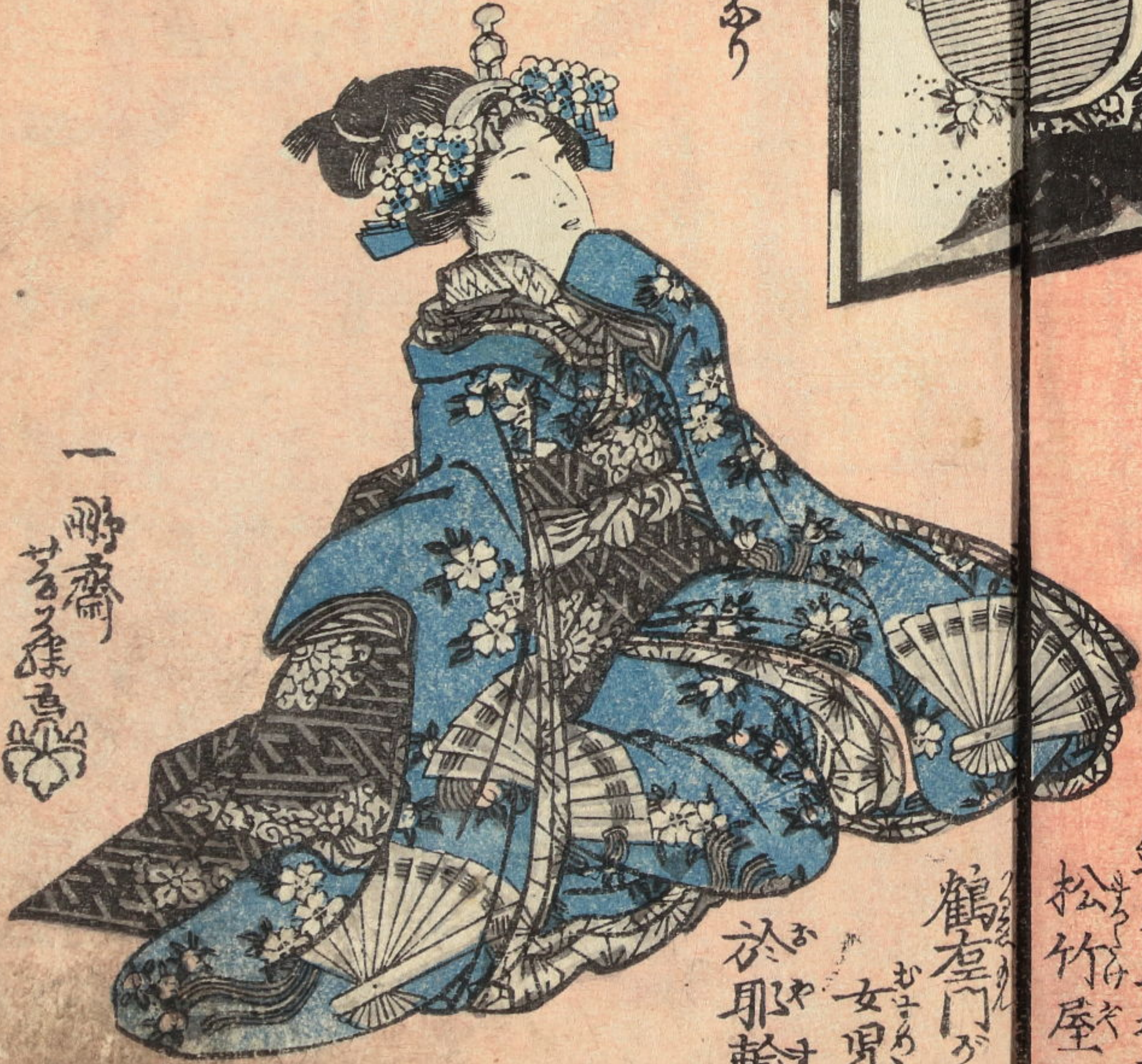


諸因果は道行の志を成すの因なり
 一。當時帰依の本を成すの因なり
 二。當時の因果にて本を成すの因なり
 三。當時の因果にて本を成すの因なり
 四。當時の因果にて本を成すの因なり
 五。當時の因果にて本を成すの因なり
 六。當時の因果にて本を成すの因なり
 七。當時の因果にて本を成すの因なり
 八。當時の因果にて本を成すの因なり
 九。當時の因果にて本を成すの因なり
 十。當時の因果にて本を成すの因なり



梅花芬々満枕夜更人定
 燈燭暗蕭索頻催睡眠
 拙著事の漁叟寐惚而誌

佛も元ハ元丈あり
 恋院太子の
 姿をば
 赤繩と結ぶ
 耶輸多羅女
 物語



一冊齋
 若菜喜

鶴左門が
 女児
 於耶輸



大老屋の息子
 泰四郎

鎌倉馬場町
 松竹屋



○大多屋の二脱
伊佐五郎
○本
妻
於
橋



惑まどひの解とぎさぐべーおやまおやま耶麻やまハ安やすくやすと。五ごふふをを見み
ををばば産うままとととととととととととと右みぎ不ふ左ひだり犯とままりりて。日ひ々々不ふ食く
ト由よし細こでで少すけけば。陶たう儀ぎののええまま未みハハ祝いわいい不ふゆゆりりこれ
をを按おトトゆ。日ひ夜や不ふおお耶や麻まがが傍そばををささららば。おお優ゆう美み等とう
務むをを始はめめららて。夜よ由よし去さるる病びやうののああく。看え病びやう等とう
采さいああららねねどども。ささららてて發はつ由よしああららぬぬ不ふらら。丈ぢやう未みのの由よし
日ひ々々未みののままくく別べつ荘しやう不ふ飯はん森しんして。医い藤ふじハハささららあり
五ごふふのの名な傳でんああららハハ有う發はつのの必かなら者ずととききけけばばららちち振ふき

く加か村むら羽は精しやう鳥とり時ときののああららざざとと定ぢやう業ごう亦また精しやう不ふ
弱じやく了りやうと。特とく之これ少すくああくくああららけけるるとと。若わししとと不ふ捨すてをを
捨すてげげ「老らう爺にやさんさん旅りよ々々食じきさんさんごごのの中なかか不ふ夜や由よしをを由よし。
おお世せ活こををああままののてて下くだささららるるらら。何なに卒そつををぬぬくく快くわいままののて。
由よし恩おんぐぐららしし由よしののてて交かうと。陸りく方ぽうをを引ひききてて我われ悟ご由よし
ゆゆららてて長ながまますすけけとと。ごごんんしし初しゆ精しやうつつてて不ふららとと祈いのち
詮せん快くわいハハああららまますすままのの。モもシし私わががが死しすすらら。老らう父ふ爺にやさんさんがが
ごごのの中なかかああらら。おお慈じききああららららとと思おもひひままんんととささ丈ぢやうををらら

が氣不あります。他の影へ小頃ます。親を
送る子の後。史を名遠て親より先く死亡の
不孝。あつとまきの壽命づくを。陰方があつと中
の。左根生とつきます。交澤不孝の子を
まはる。情い奴ごこの年月。種くと丹株さして。あ
甲斐もあく先く性く。自己が福の故ごとく。あせ
に自ら。か歎きも落いた。根木とを私。左
左と中さぐとも。こま水知のあどけさと。第一と

が氣不あり。冥途のさつくとあり。まはる。中す
ので。さつと。まはる。あせ。鳥古
か後ま。由。一。不。陶。後。へ。帰。り。て。あ。ら。う。が。お。持。え
い。ま。く。に。在。て。朝。暁。の。後。不。さ。ぐ。た。根。と。て。こ。ま。さ。ぐ。鳥
ま。の。夫。婦。よ。く。老。爺。さ。ん。の。お。世。活。ま。う。て。些。の。長。く
お。世。活。ま。う。て。ま。は。る。さ。つ。と。不。初。ま。ま。は。る。その。内。の。茶。や
あ。ら。う。ま。は。る。さ。つ。と。育。つ。と。些。い。お。あ。ら。う。こ。ま。の。あ。ら。う
あ。ら。う。ま。は。る。さ。つ。と。吾。儕。が。教。く。等。傍。さ。ん。の。を。く。の

下。何事時く。氣をつけて。老爺の世話をしなくてはなすこと
ひまき。苦銀のありさぬおまた。見えぬいさなを拱ま
て。何ともし。世を祖由あり。お後多いことを嘆くも。涙
あまら。不進と。傷。後。の。給。不。子。を。う。け。て。お。耶。麻。が
款をまのつと。えつめ。何のまア。お。氣。の。弱。い。あ。ま。り。ま
の。田。病。氣。を。そ。根。お。も。う。が。あ。り。ま。を。め。の。う。何。不。然
て。由。先。の。き。死。ま。で。山。若。方。あ。七。七。を。お。性。候。と。ま。ご。う。う
田。病。氣。不。降。つ。て。何。れ。ま。で。も。果。敢。と。ま。く。お。あ。り。任。を。さ

あ。い。モ。ウ。く。そ。根。お。怒。い。て。を。お。作。て。下。さ。い。ま。ん。た。ま
と。ま。ご。う。う。一。ま。う。の。い。ら。ふ。お。あ。り。ま。う。う。お。作。は。と。且。弱。さ。ぬ。ハ
私。ど。も。う。今。不。う。け。て。由。お。世。活。を。し。ら。ん。と。る。や。ア。モ。ウ。後
ま。う。ら。ま。う。お。ん。下。う。き。ま。う。お。ん。ま。た。う。う。世。を。由
お。ん。の。う。ら。ん。り。ち。や。ア。お。ご。い。ま。せ。ん。下。の。り。お。ら。う。一。筆。後。が。
抱。て。ま。る。春。の。帝。を。お。耶。麻。が。教。の。お。り。一。こ。り。心
後。あ。ま。い。の。お。見。い。ま。ご。う。う。く。二。七。次。お。お。ま。あ。ま。の。の。と
才。ア。ご。小。お。眼。由。ま。の。ま。り。ま。を。時。く。い。覚。示。と。と。お。笑。ひ



是の及び... まじりて うきこと

「今病人の徳とて彼是の人のゆくあはら。そま方ハマア

そりり人のいごと。夫小由地小由唯友個の持妹がころを

二死一生の大病小何振ごと一回さのみせを勿務を

きしと時あは花又とやして小居て産の容るの目見

しきうご。さうう肥立う愛いとまて。以振未姿小あ

まて中。おろえ教とん除まうご自己由種く持あま

ごの用い山あどあけきと。是を見うけちやア帰ら

まご志。志今日家業を初め。家産大ゆとるふのも。

早免のそ。そ方産の。志先をくごご。自己いあつて

のそりモウ。六十聖小由志とぬ身のとあり也。ナニ加

減不抱つそあいで他小何とらとまうとも。まご用が是

まいとも。今日いけ人限を明日の聖左振ををま

由入るぬゆご。先能の家小由此をつけまのまごそ

方産由徳伴で孫余才一の夫を限。夫多屋小あ

まて。初くと居まらば苦もあひやう。ごご。そり人

まらりあらせ。何振りよとがまらり由志まら。その時

あやア本家分肝心腹より甘あやア折廢ゆせらうとは
年不あて初めもの命を方なき不便さあまう
丈の自己の工とじふ。今のいふあや友個の扱妹初して
炊らうて存ると喫て按どもといふ人のあや。モシそのあや
あやなるが。案不息音不ゆ劣るといふ人の。以来自己の子
ともあやぬき方由親とあやのぬき官使わど不実為情
あやの不産つけのせぬ苦と。能令親子心ん別と困
こ性根不あてとす。今日い雅不う勸めとせと廻る

あやこのやあやのへ案理一遍の又舞いぬ。早く
が官ト苦く切らるるええ案が。親不を理のあやうざう
傍小あや存る鳥吉史婦中。何と執成りゆあや。口を
嚙きて良まる。か耶麻いことを喫らうて也。まき松を
撮げや。老爺えんの友招は作まき。四むがあや
まきけと。務さんゆ彼方不在と。根であや
あやの。務くあや用があやまき。そのあや女のあや
あやア。雄士と遠のて大噪ぎまき。うら私あや。

出るのがおのらうで。一日ごとと仰ますのサ。使不私がその
病氣他のことぢやアお、産の揚り。いさを自己うら
めとやらおのの。とまごで余さんお推とあ。四苦方をうら
ちやア、淋ません。何卒老爺さん何ゆかゆ。は作あ
て下さのま、トゆふお情の毫示らうい「ホンニおあ
のり通。産の他の病ひと遠らう。マアおめとやら
おののサ。老爺さんが今のやうお。は作けとごとお画
おさなる。あんどぢやアあるまの。毎日毎おん来て

いふこと。使で快ありんせん。あんの人喋ぐーといふえ
ど。音儂が兄孫お来あいらうて。快あるのあう快
あらうサトのいせお救をええ来が。暇と白眼お
いせん。せーが何とらおひけん「ア、あるおと發明お
の。この老爺の慌の秘くトあうらと鳥吉の教をうら
鳥吉の何とゆいふて。と、思あるをうらあ
作者のそくお情が一言。新調快の質おめて
その身の涙を掩し為お。おのどきさるゆをいふの。

今の世いま小こききるるああままどど父ちち小こ對たいしてしてのの換かひひ。
ままははりり不ふ教けうありあり。ああままどど由よし父ちち子この間ま。そのそのふふ易やすき
ふふりりてて。ままええんん不ふ教けう元もと終はらありあり。はは本ほんをを見みるる。後ご四し
童どうととままをを見みととせせんん。うう非ひととせせんんののよよくく味あじひひをを人ひとへへ
とと。例れいのの老らう婆わふふ不ふかかくくままりりまま。

第二十四

再また視みそのその次つぎの日ひ。おお耶や麻まがが病やまひひのの重おもいいとと。ままええんん
空くうしくしくあありりけけまま。ままええんん來きいいるるよよてて。ままええんん後ごけけりり

ととああががるる。今いま更さらののままうう小こままええんんとと。ままええんん亡なげげ不ふ把たつつままええ。
熱あつ飲いんののままううあありりととりりどど。帰かへららぬぬ旅たびのの首うしろ途とままををババッ
小こ孫まごめめんんととうう由よしあありり。人ひと々々小こ孫まごままああららままりりままりり。次つぎのの男おとこ不ふああまま。
薄うす衣ぎ被かぎぎてて。眠ねりり小こつつけけどど。祓はらけけららままるるままるる。鳥とり吉きちとと作たくら
めめそのその脉いのの人ひと々々。渾ま身みのの筋ぢん力りきおおけけままるる。何なんせんせん方かたのの
知しららずずままりり。初はつめめああままききととああらら祓はらけけららままりり。米こめ町まちのの人ひと不ふ及あずず。
おおんん。ままままくく小こ人ひとをを老らいいせせ。知しららずずせせ不ふけけままりり。孫まごままりりてて。
馳はままるる人ひとのの寡かああららままりり。ままりり不ふ廣ひろきき別べつ社しゃのの間ま。

毎ごとく小こ居ゐあつて。そのその唄うた。とていい亡な人のの生なま前まへののと
いひ出い。涙なみだをを溢あふまゆ多おほうおほき。丈せう丈せうののハハわわくくととままうう。
早はや復ふた少すく々々乃なをを飛とせせ。一ひと来きりりてて茶ちや山さんああるる。丈せう丈せう未ま未ま小こ
面おもまま。互たがひ小こ慈あま腸ぢやう火かくくああるるむむ。頓とんてて出い入にのの料りやう理り屋や
をを之これ形かたち唯ただ今いま方かたのの丈せう度ど。其その他ほか万ばん事じをを分わけけんん。
香かう華け院いんよりより新しん化けのの儀ぎ。救きう多た振しんききてて法ほふ華け院いんをを祝いわ
ををううんん漢かん補ぼささすすままいい。其その聲こゑ人ひと耳みみをを沈しんししんん。実じつ小こ
天てんとと乐らく五ご之の生なまままんん。其その難がたひひああ。とといいててるるととくくぞぞ純じゆん

ええけけ。丈せう丈せうのの後ご野のをを送おくるる。ままるる初はつ七しち日にちのの法ほふ要やう佛ぶつああるる。
ここ小こ別べつ莊じやうああつつてて。納なつひひ丈せう丈せう未ま未まハハ陶たう徒たへへ降くだるる。鳥う吉きち史し
降ふいらいら小こ居ゐてて。亡な人のの為ため書かき七しち四じゆ十じゆ日にちまでまで。通つう夜やせんせんととああるるけけ
且まるるてて。猪ちゆう猪ちゆうハハ孩わが兒ごのの恭こう也や。希き小こ屋や副ふくてて。未ま所しよへへ降くだるる。
丈せう丈せうのの丈せう丈せう未ま未まハハ小こ左さ小こ。おお邪じゃ麻まかかととをを忘わすれれとといいひひんん。
とといいひひんんとと書かひひとといいふふ。ままるる孩わが兒ごのの志しららりりとといいふふ。丈せう丈せう未ま未まハハ小こ左さ小こ。
をを忘わすれれとといいひひんん。元げん来らい乳にゅう母ぼのの二に人にんああままとといいふふ。猪ちゆう猪ちゆう未ま未まハハ小こ左さ小こ。
小こ功こう老らうああまま。とといいひひんんとと小こ任にんせせおおくく。ああままとといいふふ。長ながくくああままとといいふふ。丈せう丈せう未ま未まハハ小こ左さ小こ。

あう移うつばうや陶たう綾あや小こ降ふりえといふいふて不ふ能ぞうて丈ぢやうお斐ひ
あう小こ女めの妻つまけまど。うう来き来き若わあう若わりて。孩こころ鬼おにの
扱あつひ。緯い別べつ割ぎりりののここあり。月つきトと来き来きありととどどか
情けいい既い小こ肉にく着ちけける。伯おや母ははあまま不ふ他たのの女め子こ不ふ侍しやうら
いいおおんんとと知しままささううとと。然しかままががううとと世せ活かつせせよよとと。才さい子し
ああうういいんんのの肉にくおお。後あと足あしああううぬぬ方かたりり又またああうう。婿むこ性しやうにに控か
子こののどどううとと。昔むかしよりよりゆゆいいひひ懐あついいせせ。今いまよりより後あとおお橋はしをを
ああうう母ははととああいいづづととかかりりひひやや。ととののここをを活かつららしし小こ女め
ののどどううとと。昔むかしよりよりゆゆいいひひ懐あついいせせ。今いまよりより後あとおお橋はしをを
ああうう母ははととああいいづづととかかりりひひやや。ととののここをを活かつららしし小こ女め

左ひだりののいいふふよよううてて。別べつ一いつ家か小こ弘ひろめめををあありりてて。おお橋はしがが子こと
いいををせせけけるる。ああううととどどゆゆののおお橋はしのの糸いととと小こゆゆいいづづとと物もの
嫁よめのの甚し一いつけけままどど。そそももがが子ことといいふふ名なののここ。然しかてて、乳うち母はは
ふふううちち任まかせせてて。ああんん不ふ侍しやうららととももままるるととああくく。只ただ丈ぢやうおお斐ひが
いいふふおおののここ。他たりりゆゆゆゆああまま侍しやう不ふああせせ。丈ぢやうおお斐ひののとと安あん
んんとと一いつ来き修しゆりりをを送おくるるああどど小こ。おお好このういいつつうう唯ただああううぬぬ身みと
ああううとと月つき日ひ議ぎ。ここももゆゆままるる男おとこ子こをを産うままけけりり。丈ぢやうおお斐ひののとと
奉ほう心しん拜はい。まま一いつ人ひとあありりてて何なにととああううんん淋しみととああううんんのの新あらた小こままと

男の児の生さううが教びに大うとあうぞ。仔細五弁と
名をつけて。様よ花よと老いけがけりある縁うこの時
ふか情いさうく旅むとあく。泰の弁不詳習して
ことをおさるると財をあし。一ことか見えよお好さん
様よこの児の奇癖あしと子然してはえうう魚つき
が。おあふとんと生摸しサ押つけ大きうあいのううが
好男ふふあつて臆胎うらう。吾儕もごううとしてび振ふ
子をうの一人産さのいんど。ラサ些か笑ひヨびびい些

莞示とさるやうぞ。一そのやアかお振旅疾の癒う
らことやでございませ。泰の弁五弁さんの方が何振ふ若
ごういませう。そのやアお母さんのか笑くしの不似さう
あて入ッ。あやうう。一あんどろ知ろあいが吾儕あはア何
振も性が合あひさうで。ヨ。児の心半分も可老くあひ
はまも吾儕の子ありろと。か云あさるのを不だごとと
いのあやア何振もさ処が悪いうう。アイと云てた振うと
けさど。成うあうこの仔細坊を。このの児ふあふ

りんご^好「モ」左振^{きり}あまきびこのお見^こい何振^{とん}不僥^{ありせ}伴^り
あまきびせん^{ひが美のき}先次人^{あま}不^{あま}岐^{あま}ま^{あま}く^{あま}く^{あま}。昔^{あま}穰^{あま}ごこのお^{あま}子^{あま}が^{あま}あ
ま^{あま}。陶^{あま}徒^{あま}の^{あま}か^{あま}能^{あま}ど^{あま}り^{あま}不^{あま}き^{あま}い^{あま}さ^{あま}る^{あま}ら^{あま}。泰^{あま}と^{あま}友^{あま}い^{あま}の^{あま}熱^{あま}飲^{あま}
て^{あま}中^{あま}く^{あま}左^{あま}振^{あま}い^{あま}あり^{あま}ま^{あま}せ^{あま}を^{あま}。史^{あま}ご^{あま}ら^{あま}ら^{あま}このお^{あま}見^{あま}を^{あま}を^{あま}
穰^{あま}の^{あま}か^{あま}子^{あま}と^{あま}あ^{あま}さ^{あま}い^{あま}ま^{あま}す^{あま}り^{あま}也^{あま}。さ^{あま}。法^{あま}辯^{あま}い^{あま}あり^{あま}ま^{あま}ん^{あま}ま^{あま}
「その^{あま}ま^{あま}ア^{あま}ま^{あま}ま^{あま}を^{あま}振^{あま}あ^{あま}り^{あま}の^{あま}サ^{あま}。左^{あま}振^{あま}と^{あま}彼^{あま}地^{あま}へ^{あま}隠^{あま}
て^{あま}振^{あま}を^{あま}ま^{あま}す^{あま}。何^{あま}不^{あま}由^{あま}ん^{あま}を^{あま}い^{あま}ま^{あま}す^{あま}。右^{あま}あ^{あま}由^{あま}一^{あま}所^{あま}不^{あま}隠^{あま}展^{あま}を^{あま}
お^{あま}ま^{あま}す^{あま}。七^{あま}年^{あま}也^{あま}。マ^{あま}。二^{あま}十^{あま}年^{あま}也^{あま}。亦^{あま}の^{あま}と^{あま}サ^{あま}「モ」二^{あま}左^{あま}振^{あま}あ^{あま}り^{あま}と

ま^{あま}ん^{あま}と^{あま}。一^{あま}生^{あま}涯^{あま}ま^{あま}く^{あま}の^{あま}う^{あま}て^{あま}。以^{あま}振^{あま}不^{あま}僥^{あま}伴^{あま}い^{あま}ご^{あま}の^{あま}ま^{あま}せん^{あま}
「あ^{あま}ら^{あま}」を^{あま}振^{あま}あ^{あま}り^{あま}を^{あま}。誰^{あま}も^{あま}の^{あま}お^{あま}ま^{あま}で^{あま}あ^{あま}い^{あま}の^{あま}何^{あま}の^{あま}か^{あま}り^{あま}と^{あま}
臆^{あま}胎^{あま}く^{あま}「三^{あま}雅^{あま}不^{あま}由^{あま}ま^{あま}ら^{あま}う^{あま}」ま^{あま}せん^{あま}ト^{あま}後^{あま}事^{あま}を^{あま}か^{あま}ら^{あま}
愈^{あま}さ^{あま}む^{あま}由^{あま}。私^{あま}合^{あま}ま^{あま}ら^{あま}う^{あま}と^{あま}あ^{あま}ら^{あま}ま^{あま}す^{あま}ら^{あま}。初^{あま}て^{あま}月^{あま}日^{あま}不^{あま}實^{あま}
考^{あま}あ^{あま}り^{あま}を^{あま}ば^{あま}ら^{あま}の^{あま}時^{あま}の^{あま}何^{あま}ど^{あま}不^{あま}う^{あま}十^{あま}年^{あま}を^{あま}ま^{あま}す^{あま}。泰^{あま}四^{あま}弟^{あま}の^{あま}子^{あま}
一^{あま}不^{あま}あ^{あま}り^{あま}ぬ^{あま}。あ^{あま}ら^{あま}る^{あま}不^{あま}七^{あま}果^{あま}八^{あま}果^{あま}の^{あま}以^{あま}ら^{あま}。亦^{あま}考^{あま}ひ^{あま}を^{あま}ま^{あま}す^{あま}
不^{あま}その^{あま}考^{あま}法^{あま}大^{あま}人^{あま}由^{あま}を^{あま}ま^{あま}ら^{あま}く^{あま}及^{あま}び^{あま}ご^{あま}う^{あま}。亦^{あま}考^{あま}あ^{あま}を^{あま}ま^{あま}す^{あま}
あ^{あま}ら^{あま}不^{あま}。二^{あま}三^{あま}度^{あま}あ^{あま}り^{あま}て^{あま}よ^{あま}く^{あま}晴^{あま}紀^{あま}を^{あま}考^{あま}あ^{あま}り^{あま}て^{あま}す^{あま}ら^{あま}く^{あま}補^{あま}む。



幼年
 吉書
 在



張江神

元 息をうらむべき現紙あり。いざさあ史と云て居るふ。
かすの腹もさるる気もあ。そのとふおのさうと。その息を
うちしる。墨のたを「逆まど。さう不辨とさるる色由前
ことをつて史あまの「花踏ありてらち替び「アア
ぞらと自もが子ど。あひ切てその息を。おとら気
あ。末憑りの「ト涙とあ。替びてと居るけり。

嵯峨の假寐卷之十終

嵯峨 假寐卷之十一
耶麻

東都

松亭金水 編次

第二十一回

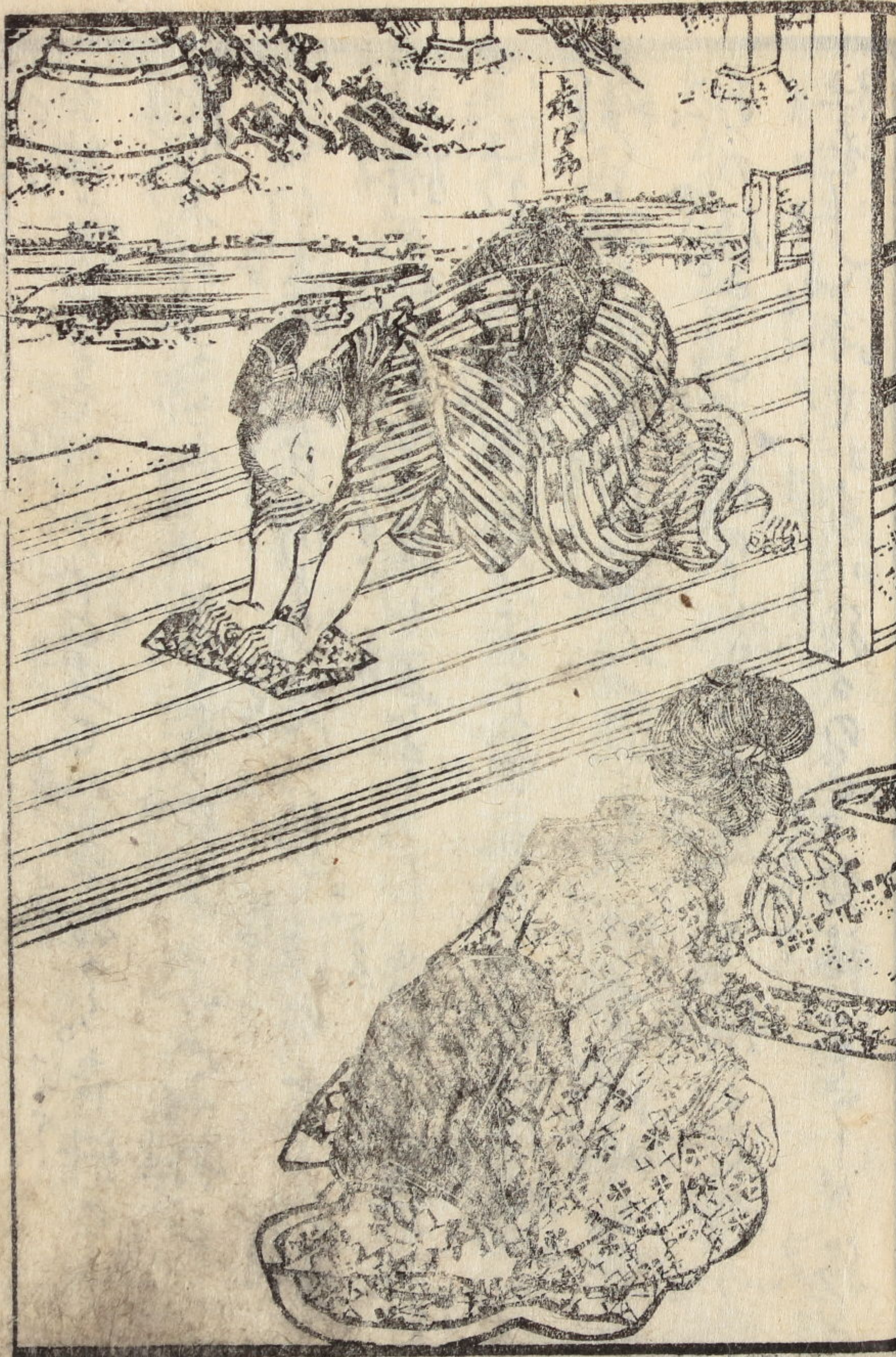
おとそ宿執のひく新い。遁まがらけりのあつあや。お橋ら
右小左泰の弟が。伶俐不つけてゆん小惚の老の卒
あて彼を逐ひ。その牙子とていあうぎきと。伊佐五郎
をりて「さあさう。この家を継せあば。その恩産の母
小由信也。茶曙茶花ハハの位。泰の弟とて格別あり

と種く心を若しめしめし。よき思按ゆあり。恭也。帝由。
まごぞりく十二あり。逐出たき。誠度ゆあり。ん。の。ハ
せん。と。辱人。ある。例の。多。造。を。密。小。招。き。一。昔。併。ハ。何。根
り。ハ。自。の。の。恭。也。帝。が。否。也。く。あり。あり。け。ま。ど。生。指。あ。ま
が。利。發。ぞ。り。つ。て。ま。ま。い。く。且。取。の。心。秘。義。中。を。ま。ぎ。け。り。
と。お。ん。ど。ば。出。来。さ。り。不。由。あ。あ。い。だ。ら。う。あ。ら。う。始。め。ら。う
の。物。本。ど。不。よ。り。て。彼。兒。を。ば。陶。後。へ。遣。て。跡。を。と。ろ。せ。
伴。佐。五。帝。を。昔。併。の。子。あり。て。爰。の。家。を。継。せ。ま。ら。ば。

使。て。氣。が。現。勝。ま。る。が。何。と。その。仕。法。ハ。あ。る。ま。は。り。一。友
根。サ。こ。ま。い。家。に。易。あ。ら。う。を。些。踪。跟。ら。う。ま。ぎ。り。ま。ぎ。り。子。然。
一。あ。ら。う。條。を。中。せ。ば。且。取。の。さ。め。あ。い。何。方。由。心。兼。子。を。
後。先。と。中。を。分。サ。ま。ぎ。で。陶。後。の。お。血。脈。ハ。恭。也。帝。
さ。み。で。ま。ぎ。り。ま。ぎ。ら。う。彼。令。此。方。を。心。想。故。不。お。生。
ま。あ。せ。の。こ。う。う。と。ま。ら。う。して。友。根。系。ら。ぬ。こ。い。あ。い。た。
現。ま。う。あ。ら。う。爰。の。且。取。の。思。一。反。あ。い。何。で。ゆ。か。ん。恭。
曰。希。さ。ぬ。不。ら。を。お。讓。あ。さ。る。積。り。と。マ。ア。イ。ん。え。ま。ら。り。

忍さむろりを。きき居るていありませんぞ。びる日老爺
えん右様は作と。衆四弟由モウ十二不成ていふ。
今まのやうな志ありやア。おことあり。徐くと人間並
の物作を教へて住む。自己が跡を継せらぬの大旨
の存公人を。使つてとて。痛さ痒さを。あつちのぢやア
何様もあつね。然しあつちを自己が居まり
者しく出て居ると。却て悪いともあり。まづ方ごう
工支して。宜様不飲てとて。勿論もあひや。学ば
るる。

あるとやア。男親の持あつち。そ処に自己が何様も。世
話をせうけと。その他いそ方不慮むらのお詞。ホニ
至理のあつね。假令肅しくあつちのや。男の親い子の
方で。不慮懼らうて居るけと。女あつちといふと。自
麻ふまゝでもあり。まのい。右左不井い。ちて。身
あつちのことが。幾干もある。そらで。今日依度。おあつち
こと。あつちがある。勿論力もあ。統中細し。身不慮
あつちの。力業也。まづ。身不慮。あつち。あつち



おけり

おけり

おけり

おけり
おけり
おけり

さ由「マサ今まや横のりなを。望小の志あいのあど
ら。ホニ茶碗の仕舞初由。お知りぢやアあるまはうら
らやア誰小で由。笑が宜。あつし自己の面割とら。
ことをして呉是彼して呉と。他小分付ぢやア。あう
ません。トかる。大家の志願。是子小。似合ぬもの
のいつけ方と。後小居ら。宇太帝が惶と。妹を
をめ。一憚りごいごい。ます。なう。お坊さん。小。女。作
新。余。女。中。の。いつ。人。四。用。と。是。を。何。ぞ。お。坊。さん。お。

させあさるのせごごい。ます。を。おつして。ま。様。のお。使。ひ。あ。さ。る。
お。侍。女。を。誰。め。申。働。き。と。の。代。り。五人。居。ま。は。ん。人。は。何。と
いつ。人。の。せ。ご。ご。い。ま。す。と。何。ぞ。お。坊。さん。が。お。身。の。か。た。り
と。ト。し。て。由。解。ま。り。ト。の。せ。ご。ご。い。あ。さ。る。お。坊。さん。の。氣。あ。る。
眼。を。睜。ま。し。て。白。眼。つ。け。一。何。の。いつ。ご。ご。い。招。出。は。そ。方
の。あ。つ。し。ご。ご。い。あ。い。女。ど。由。い。哉。干。あ。の。て。由。金。あ。さ。る。
の。用。が。あ。る。お。坊。さん。の。決。が。つ。ら。う。ら。ん。だ。い。な。個。お。ま。え。て
あ。さ。る。昔。唐。土。の。王。さ。な。小。漢。の。文。帝。と。つ。し。お。

方が老しむ。老の親お四孝の元で。元来天子の
の工ごう。何の更衣も命辨も。お石仕ひの官
女ごとい。裁千とい。限りもあく。何一ツ。四自おま
き。ぐんとも。正けま。ま。慈母さなのお傍のとい。
他も。ふりけま。四自。お。抱を。このと。あ。ぐんを
のお慈母さな。四病。お。の。時。色。のお。服。の。帯。え。由。
お。解。あ。ら。う。む。四。看。病。ど。ん。く。四。大。病。お。あ。り。て
願。由。お。撼。容。で。さ。る。時。お。あ。り。法。垢。の。い。こ。あ

お。一。ツ。で。お。持。除。を。あ。ら。う。と。故。人。日。念。感。ふ。し。て。
四。孝。の。を。貴。め。し。し。二十。四。孝。の。中。へ。の。是。今。の。世。を
由。人。の。子。の。體。と。あ。る。こ。の。い。ふ。ゆ。い。古。い。本。お。り。ま。て。あ。る。
古。報。し。て。見。し。し。子。の。身。と。し。て。親。の。と。ら。何。も。由。
自。身。お。ま。さ。る。が。孝。の。元。で。お。ま。さ。る。し。て。孝。の。元。で。
こ。の。一。ツ。が。元。の。と。を。さ。さ。せ。孝。の。元。の。と。貴。さ。せ。ら。う。
と。あ。ら。う。し。て。分。付。る。の。ご。う。を。方。を。い。ま。を。ま。さ。る。
ぞ。天。子。の。子。と。う。ら。下。ぎ。ぬ。の。と。を。ま。さ。る。の。い。お。ご。と。

おのり入るまゝに音併が梅いとあひ入る。その二つの中ど
らうが可也子あは縁をさせうと。いんの母も大
折磨をさうし。他の痛さをさえろ。為サト安
今まう字ま希い。かま初めあうまう。然いさう
あまう。勝里のいまが。あまう。小止小けと

第二十二回

とまう。お情の初。再小。例より早く起て。茶や希を
あひ使入。いまが。勝里。由疾く。遅やう。お風ふど

の吹と入い。手足の指。中。新。難。考。り。小。お。り。入。時。ど。小。用
持いあふん。已い。得。を。表。表。秘。その。と。小。居。て。傍。火。
狭ひきと。中。優。くと。大。燈。小。手。足。を。焼。り。あ。ま。う。を。ま
ま。処。を。挿。け。ま。を。杖。と。その。事。毎。小。指。揮。と。眼
由。あ。ま。を。働。く。ま。ま。ま。ま。の。茶。や。希。の。難。考。小。揚。枝
り。ど。あ。ま。指。出。し。由。勝。脈。小。壞。ま。燦。ま。て。苦。患。や。る
う。と。あ。ひ。ま。ま。の。元。来。恰。削。生。ま。ま。由。名。母。の。機。張。に
ま。ま。の。火。ま。ま。さ。焼。く。て。働。く。を。小。勝。待。女。婢。女。ま。ま。の。

「さうお母のすき振る工場の私どもがいつまでか
「さかゝるお母さぬのお傍すつらうくお孝業もあつたは
「勿論此も由お母さぬの巨あつては振お枕
「辨うらお福まで。さあお坊さんお洗ひせう。それ
「あふくまをさへ。そのあつたはと後しくは作す
「けきと。まごお十二のおさあお史をありとも男の
「見を振あともせせ中次の勝まり振いさる
「お母さぬが後として入つてお母さぬの冷方もあつた

「振あつたは私どもが洗ひ振あつては
「さんか振あつては中せつたはと後しくは作す
「入あつたは振あつたは在あつたは。カアくお母さぬ
「振あつたはお母さぬを振あつたは。マアくお母さぬ
「まアお母さぬを振あつたは。別あつたはと後しくは作す
「お母さぬの風のお母さぬ。雑巾がけまを振あつたは
「お可もさるお母さぬ。祝あつたはと後しくは作す
「おまへおありけきと。況て字を振あつたは。お母さぬ

淡^{あま}に。櫻^{さくら}貝^{かい}で由^ゆお拾^{ひろ}ひあさつて。史^しが官^{くわん}お慰^{なぐさ}め。五^ご
老^{らう}あんども茶^{ちや}と遠^{とほ}つて。ふらふら痛^{いた}屈^{くつ}根^ね措^さ子^こ。言^い
新^{しん}ハ禁^{きん}物^{ぶつ}とあつあつ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}弱^{じやく}い喜^き
を吹^ふ出^だし。一^{いち}ハイヤぶら由^ゆ惚^ぼいません。哉^{やい}茶^{ちや}どしどし
あめす。モウ茶^{ちや}年^{ねん}ハ本^{ほん}卦^{くわい}還^{かへ}り。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}
史^しでええ。氣^きがあつて。史^しおたつて。時^{とき}おとら
で。余^よ小^{せう}茶^{ちや}の一杯^{いちぱい}由^ゆ欣^{きん}せ。茶^{ちや}坊^{ぼう}を振^ひめ。子^こども言^い
大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}

郵^{ゆう}不^ふ。一^{いち}ハ年^{ねん}場^{じやう}女^{にょ}がをりませら。あつて。史^しが官^{くわん}お慰^{なぐさ}め。五^ご
左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}
イエ。全^{ぜん}く左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}
の完^{かん}で救^{きう}回^{かい}出^だ會^{かい}て。よ。左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}
河^かあ。ろ。ま。左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}
一^{いち}ハ運^{うん}入^{にゅう}ま。左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}
よ。入^{にゅう}ま。左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の容^{よう}子^こ小^{せう}こ。一^{いち}ハモウ左^さ振^ひり大^{だい}分^{ぶん}退^{たい}屈^{くつ}の茶^{ちや}

花を浮かめて出に「サア命とく素赤。宝物を遺す
せら。サア命を山へ下りく。ト菓子を取て子供小
や。素赤の神由父のお。友をを出せば「何ごまア。
おあのもの様移くる。然して肌も腫さうけど。
モウ。之月の夜を風。独れ未まりの止がのまごころ
コレ見おせよ。おごんのもより由様おへ何不独
二木の風の糸を撈て由。終まりひどの荒やうど。コウク
うとらう。ちとせき
字を帯些。鬼をつけて。は松不様あくる。終へ

やうおして素赤。モウ。懐く暖うおあるうら。ら素赤がやう
ねへ。筆どが「ナニけは。風のあげませを。独れ未まり
あへ。いません。」と。さぢやア。まア何まして。は松不
が荒。とらう。ト不愛い。まことと物映不。難中かけしと
このあうお。あう。いとく。鬼の笑。ん。まご素赤の神由字
を帯。由。まことと。い。まご。ひ。ある。より。あへ。トキニ。且。物。是
うら。素赤。由。井。が。深。と。う。ま。ま。せ。う。ら。一。は。松。不。子
供。あ。ア。その。方。が。あ。り。う。う。う。ら。サ。ア。子。く。出。り。け

おろし下をまき出て漢色不ぬり。破不晒落とる様
の貝あど拾ひ致かまひ。見まぶ遠の破たご不踏
と見え白き鳥の。幾子ともあくをり居り。喪りて
居るを丈夫をの。見え居り。が子供等を喰べ
コウ。彼処不居る。を石をおつけして中つと老不也。
何れも好まぬを。田舎買不玉まが。何と老て見え
移く。トいさきて。致ぶ子供連中不の。老不也。散
部。丈夫あ。母方の甥。若くは。従弟同古。今

年十五不ありけま。子供の中の年寄あるが。連て
出て。色を見まひ。サア。後どおつけして。後中
也。あ。お。彼処ま。い。やう。で。由。二十間をりあ
ろ。お。ち。この力ぢ也。才一石。が。達。ま。也。あ。へ。ト。朝
る。ご。く。不。の。を。ま。い。う。い。了。得。子供。由。勃。然。と。り。て。あ。り。く
て。ぎ。り。の。石。を。拾。ひ。か。不。任。し。て。抛。つ。け。し。也。現。不。散。を。弟
が。い。ん。ご。く。居。り。ぬ。ゆ。ま。け。ま。い。ば。散。を。弟。ハ。笑。ひ。出。し。一
史。不。不。せ。く。と。の。存。り。ご。ト。レ。く。昔。餅。が。本。事。の。ち。ど。と。



お月おかけやうト碌を松と観着を定ぬらちと云
とまぬ中らぞ。ちとど石不張きてむとあつ踏一
容不。ちのとまどもまこび方へありまば亦もうちのら。
之に交りて中ら物に會く曹とらち笑へ人敷き宿
へ款を赤く「サア」是あとおお方。モウ一遍やのて
ん家せ。何程して右松井く中るのうト云ども
誰由出るのあ。敷き宿のああを向き「イヤア
行まんの衆の衆さんうまど一遍のあつ物「サア」

衆さんあつて出候「おおおさ」のけあつものヲ「どせ
とらあア物めつけまど。あつてんあアから物「サア」
サアト物めらま。衆の衆のえまわつて。色色の碌を二ツ
拾ひ「サア」この中であつら。山篠を在替らうの
どトのひり觀えてらちはくまば。過るんとして一程の
踏。突前へ中りけん。その後を処へ倒るまば守
ち宿の在踏して「ヤア」中つてトのひあがら。一散不
産ゆきて。まど軒衆まる。踏を押へ産戻つてま

ちぢみ。を拵とんお力業ちぢみハ万い一のとて。怪けがおでもあさるし
はまのませんとん。使とんよりか降りあまの心こころ。投な麻ま具ぐ
ろ其こおる拵しやうぎる。を拵とんおとふあまの心こころトとあつく寄あひ
めて彼あま処こころ此こころを遊あそ鏡かみしつその黄昏ゆふぐし一い回ま不ふ降ふりり
けり

嵯峨の假寐卷之十一 終

雪廻ゆきのまわ
耶麻やま

嵯峨廻假寐卷之十二

東都

松亭金水編次

第二十三回

さくも ぶいむらうらうらう
却かえ後ご春はる未み散ちりを糸いといけん投なめて糸いとや糸いと不ふ負おと
るを悔くあかくかりひ。何なんをがふして渠みち不ふ務む。その心こころををが
がまじい。その勢いきほ情なさけを晴はしがつと。僅わずかのこゝを根ね不ふあつて
そまより恵あまさぬ宅たくへ中ちゆう降ふりらむ。彼あま不ふ連つなる小こ奴やつを降ふ
し。その身みハ大おほ多おほ座ざへ泊とどまの積つり。うち連つて均ひとり来きの

「今日中井が湯で火和をやる。フイくやうを御宅へ
侍て。投府奥り基り將基が。官らうとおおひ云う。
何り工番さんハ。基也。お基也。出来もの。左折サお出
来あさるとや。と前が。まごおお折お来いりき。基ハ
丸の四目殺し。お基ハ豹の利尻を。おまてえあすのと
斗アとごまごのまん。左折りとまごぢやア。對牙不あ
わ。自己由若うア出来おけきまご。史あやア些倍ご
らう。今お湯でも沸きまらう。一ま教てあげて下

「ま。私ハ子供の時かハ。死す不あのでやうま。こが
大きくなあちやア一向止て。殊不弱くあうま。ナラ基
お基ハ止て。飛ても。ま折小下るらんぢやア。わ。ととま入
が左折りよせ。ト。お折侍女うけ来り。アウ。折を命さぬ
お湯をなま。今お湯をあげます。う。一。お湯を
知ごま。あ。早く何ぞ仕交りのご。一。お湯を
おまひあすのて。お湯を沸きまらう。然して。お湯とあさ
いま。ソラ。お湯を沸きまらう。一。史あ。う。お湯を沸き



この次陶後の光玄米の病氣をいひて僥倖といふは
あらねど種くといひ賺へて宇右衛門は米の病を伴
ひて陶後の家へ住けしむ。光玄米を拾ひ鳥吉史
帰中。二おきりのと音教をこら不影て米の病は落
の鳥の林へ放さし搥不盛さし一魚の子の川へ捨る
ふ地して。多定由仲るるひあるべし

第二十四回

かくてことさう宇右衛門は。か橋が日以米の病へ怒持

あつまるそのより。在。父の鳥吉と母のか優多不精く
語つていふ由して。此方へ長く止ありん然まど由光玄米
不。この病氣病不い入あふか橋を悟さす。末を。志年
不業トさせて。益もあまらふこと。この病をい努不中
あつさす。然まど由米の病を。此方へ長く往めん
あは光玄米より詞あつて。彼方へまことといひがごと
か何いせんと言右衛門父子。種く高後の中あひま
ど。か橋が病あひ日米より。若由あまあふ中あま

見えぬが来の子あり。殊きう今一個とありて且
言老の事。こ小あり。わりのを若を破せんも亦
んあり。から時々に偽云也。佛小初謂方便力備也
後日不発見えあが下罪を才一箇小。妙記うけ。ま
の。このこ小厭人。こつハと。字を神ハ若年あがら由
思慮いと深きものあまら。後の衣まを考て。備
録念不到り。見え来由年考て今う深世小
とあり。来世帝のこ七人の遺版とる人あぞ。成づくハ

二三年以方小あきて退く。小成人をゆえま欲く勿
福手あまひ等。體以下。ゆ小まきと貴人。やその流云
ハ助也。よき脚道こと受け。け。亦七思く。の若あき
ハ。まをせん。の難う。ん。さ。飲り。ら。あ。二。年。以。方。に。致
ア。中。う。見。の。と。老。の。形。ひ。ど。と。見え。来。が。は。後。也。
解。の。あ。が。小。の。ひ。け。ま。ど。丈。あ。の。手。放。して。お。く
ハ。何。ぞ。心。あ。い。應。ぜ。ね。あ。が。ら。老人。の。初。ゆ。不。得。然
出。さ。ま。ら。ん。あ。う。か。橋。小。商。依。ま。ま。ら。お。橋。ハ。こ。と

ど僥倖と。おりのふらうてうき様様。さうが陶後の
祖父さぬが。ん任せふあまぶーと。あるふらうてうき
弟。大不難びさう帰る。さうてそのよりを父母ふゆ。
かうして傷くさうてびり。物不自中のあまうふ。
ふを着て冊くわどお。弟は弟の父母の。傍不存さう
様。一とわりの月日殺まをさう。光陰披のどく
の碑云々。既小六年の星雲を建て。弟は弟のあま
十七業。まう茶袋いさうさうと。人並より大兵ふて。

一。おのまら。こ
おのぬ人の二十と。ふらうてうき。どの骨柄あり。勿論
余へ。月ふて度。あるひ二月ふて度。位は父母の機張
を。さふ。性むひのあけ。けさ。渠が。次才不成。長さ
を。さふ。弟のいら。ち。教び。ち。女十七ふて。柄日大さ。元
服さうて。お。應の。板を。白。要ん。と。ふ。計。收。ふ。男。さ。入
毎ふ。と。ま。さ。の。の。こ。し。清。く。く。元。奉。文。家。の。不。思。ふ。ま。
町人。あ。が。う。家。を。一。郡。一。郷。の。主。ふ。由。居。の。と。い。つ。豊
饒。あ。る。と。あ。ま。さ。娘。の。身。に。誰。の。も。の。の。縁。組。を。

さう。おち由知つる。鬼が若の。産系招へ北條家に
てか。乳お入りの。出改役。吾儕の。年来お出入して。今
も。暫らぐ。酒や。出招由。お目あう。て。下さる。位。西家
を。下さる。が。その。四子息の。概を。御どの。今年に
二十。二十一。と。立派。おまよひ。美刀。稱。取。う。後。山を
お。探。あ。さ。さ。と。借。く。長。一。張。り。や。ま。ご。お。愈。の
山。源。由。あ。一。物。が。今。新。味。小。来。て。借。松。竹。屋。の。女
鬼。お。耶。越。い。よ。い。標。致。と。世。石。の。神。判。ぞ。さ。な。ら。と

事。う。う。易。く。性。を。ひ。を。ま。さ。と。の。町。人。で。も。若。う
あ。へ。う。う。筋。が。快。不。欲。い。の。切。縮。筋。の。う。若。へ。何。招。う
と。あ。つ。て。入。魂。の。若。不。欲。と。初。縁。て。承。知。た。彼。あ。へ
と。あ。あ。何。卒。昔。あ。い。と。い。ら。う。う。う。う。他。の。人。より
ぞ。う。な。を。取。む。が。一。妻。の。子。を。と。し。と。懸。く。味。不。欲。と
の。と。ぞ。う。て。た。招。り。の。女。鬼。あ。う。定。め。て。初。と。う。う。と。云
わ。の。法。山。小。あ。ら。う。け。は。と。と。と。延。ハ。そ。と。さ。な。が。別。深
甲。斐。又。小。一。骨。お。て。急。く。小。と。う。極。う。中。う。小。あ。と。と。筋



たのき



おやす

荏柄天袖の境内
瀬太郎於耶輸を
見せぬ

只た根りんと見えぬ由海を深とせうどが内実ハ執
る影のあのと影で。今回ハ表むき一ありの。乃と性
とりふまであましく。執極むやいお遠由あり。今と斗ハ
牛連で町人の町人が。交まふゆふ易し。さしてお角
のおり一石。お氣の毒あがう先根く。官やうふおれ
こ中まこと。案不差ひ一は後不。彼人の遠却しうら。が。
巻束の方緯由あげ不。結合未ぬるゆのあまき。今
父他不先約と由。世のひあて。飯合思業あまが再

りんやう。左根りん伏と一息あう。毎日のせう小書り
共併へ何の影のあいの故不。今のいんあう八九分ハ成終
の積り不。そと口後何根由今父外へ極ととい何分
いそとね。然しこまふ。食極づく。稚さい時う納号由。
大きく成て互不祥ぐる。破後不きる由。間くある。整
いねとて後方ハあけしとど。今見あう不。あうらてい何
根由。脈う。廉忽不。吹えうて。見うう出入の物。磨る不由
ある。どうせ出来あいの縁組を。あうりや。最大強きうど

